注意トゲタ物ミリム

三ウラ

馬醉木第二巻之三

四ウラ

萬葉集短歌私考

伊藤尤千夫

旅爾之而、物戀之伎乃、鳴事毛、不所聞有世者、孤悲而死萬思、

此歌は疑問のある歌である、古義は、第二句を物戀之伎爾とよみ第三句を家事毛とよみて、旅にして物こほしきド家ごとも聞えざりせは戀ひて死なまし

とかつて居る、他は多く字の通によみて、第二句の「之伎乃」を鶯（レギ）の（とを）とし従て第三句は「鳴くこと」とてある、併し此歌のさまにては「鶯の鳴くこと」もと見ては解しようがない、其類字あることは句論であらう、さりとて全然古義の通りであらうとも信じ難い、古義は、三巻の歌に客為而物戀敷爾山下赤乃曽保船奥榜所見、二十巻の歌に伊倍加

ゼハヒニヒニ フケド ワキモコガ イヘコトモ チテ
是渕比爾比爾布氣等 和伎毋古賀 伊倍其登毋 遅豆
クルヒドモナレ
久流比等毋奈之 などの歌に依て翌て居れど、猶不審を感じない譯にはゆかぬ、第二句の「之伎乃」が鶯でなくは無いは句論であれど「乃」の字が果して「爾」の誤であるか否かは

あらう、さりとて全然古義の通りであらうとも信じ難い、古義は、三卷の歌に家為而物戀數爾山下布乃曾保船奥榜所見、二十卷の歌に伊倍加

是波比爾比爾布氣等和伎毋古賀伊倍其登毋遅豆久流此等毋奈之

寓を感じない譯にはゆかぬ、第二句の「之伎乃」が鵲で無いは句論であれど「乃」の字が果して「爾」の誤であるか否かは判らぬ、要するに此歌で疑問になるは第三句の「鳴」の字である古義の如く「家事毛」と刻たいが、三小に相違なからうとも思へぬ、假りに古義の如く訓みて解するならば、旅にあつて何となく物こしく家のことなど思はるてならぬのにその上家からのたよりでもなかつたらば、いよ〳〵たまらなく戀死してゐまうのであらう、と意である、且其詞は外には、三小か戀死もせず命のたすかつてゐるも全く時こい家のたよりのためであると、其家からの消息を非常に喜んだ意味を含み居るのである、一通りは示で解つて居る樣であるが、猶よく吟味して見ると、結句「戀て死なましの句が非常に強い意であるに上四句が割合に弱い、戀ひて死ましと感じた勤因か

上四句の内に充分與は小て居らぬ、作者の心持か判然せぬなくは、却て疑も起らぬ譯であるが、此歌は兎に角詞に判らぬ所があつても、歌全体

様であるが、猶よく吟味して見ると、結句「戀て死なましの句が非常に強い意であるに上四句が割合に弱い、戀ひて死ましと感じた動因が

上四句の内に充分顯はれて居らぬ、作者の心持が判然せぬなくは、却て疑も起らぬ譯であるが、此歌は兎に角詞に判らぬ所があつても、歌全体の意味は略解し得るので、今少し面白い詞であつたのぢやないかと思はれるのである、

現に今も戰地にある人は郷里の消息が最も樂しいとは事實である、此歌も其心持を咏めるに相違ない、新一時妻を置いてある人は殊に家の消息に深き樂みを感するのであらう、此歌をも統句に戀て死ましとまで云つたは決して尋常の家思ひではない、されば此歌の作者の衷情を推測して見れば、苦しい長の旅でもう〳〵家が戀しくなつて堪られぬ、妻戀ひの思で殆ど死にさうである、さて〳〵家の消息が来るはかりで僅に命が助かる、嬉しき人のたより、其たより丈を見た許りでも命の生きかへるほどに戀しき人よ、今の其心を察して よとの切なる思であらう、それを詞の上には表に述べて、家の嬉しい消息でもないならは迚も切

なる思ひに堪えられないで戀死に死ぬのであらう、といふのぢや、故に此心を歌に咏むからは、家戀ひの堪かたく切なる点をも強く歌はねばなるまじ、さう

かゝるほどに戀ーきき人よ、今の吾心を察して
よとの切なる思であらう、それを詞の上には反對
に述べて、家の嘗しい消息も切
てもかいなしは述べも切

ふ思いに堪えられないで戀死に死ぬのであらう、と
いふのだ、故に此心を詞に味はまは、家戀ひしの
堪かたく切なる点をなほも強く顯はさねば、さう
でなくは、戀ひて死ましの詞が一向きかぬのだや、さ
れは古義の訓解でも少しく滿足が出来ぬのである、
つまり所旅が苦いたに一信妻思ひに堪えられぬ
、御身が戀しい御身の消息許で命が助つて居る
との歌、意に相違ないが、以上の詞では唯たけの情趣
(充分には)が顯れて居らぬといふに過ぎない、萬葉の作家と
て皆々上手とも限らぬから、或は(因より確)從来の訓が
眞か古義の訓が眞か(定は出来ない)只誤字かあつ
たとすれは種々な考も浮ぶ譯である。

大伴乃、美津能濱爾有、忘貝、家爾有、妹子
忘而念哉、

ほとものみ津の濱なる忘れ貝家なる
妹を忘れて思へやも

「大伴の」は「みつ」にかゝる枕詞である、み
津の濱は諸書に難波の三津とあつて攝津の國にあ

る其の名所、「忘貝」は三津の濱にある忘貝と呼
びかけて結句の忘れて思へやの「忘れ」と云ふ詞へ音
調の上にかゝつた紋詞(ちや)、集中例多き序

妹を忘れて思へや

「大伴の」は**み津の濱**の「みつ」にかゝる枕詞である、み津の濱は諸書に難波の三津とあつて難波一の國にある古の名所、**貝**「忘貝」は三津の濱にある忘貝と呼びかけて結句の忘れて思へやの「忘れ」と云ふ詞へ音調の上にかゝつた叙詞である、集中例多き序歌の態である、

歌の心は、第三句迄は序で意義はない、家にある妻を決して忘れて居りはせぬ、忘れて居る所ぢやない、思つて居るのぢやといふのである、戀ひあれど、此歌の作られた情因を考へて見ると例に依て興味がある、予は前にも云ふて置いたが、此時代に聖駕の供の夫は身分低き人達には余程苦しかつたと思はれる、人が律義であるために殊に苦痛であつたらうと信ずる、こゝまでの歌に見ても身分低き人の歌は皆痛切な情を叙してある、前の戀ひて死なまーの歌をともさうである、作者未詳或云ふ高安大嶋と傳の判らぬは卑しき人である、知れて居る、妻なる人も充分大の悩苦を察して慰藉の消息をしたさとが前解の歌に依て知れるであらう、此忘貝の歌い全く其反對である、

卑官のもの、立千若はなくて、諸王諸大臣などは滞留の地にて夫々女を召したものらしひ、次の長皇子と清江娘などに見ても判る、此歌主身人部王なども、矢張女を召したらしく旅にして切戀しきに堪

い知れて居る、妻なる人も充分覺悟其を察して
慰藉の消息をしたことが前解の説に依て知れる
であらう、此忘貝の説い全く其反對である、

卑官のもの、辛苦はなくて、諸王諸大臣などは滞
留の地にて夫々女を召したものらしひ、次の長皇子
と清江娘とのことに見ても判る、此説主身人部王
なども、矢張女を召し(たらしく)旅にして物戀しきになど
といふ方ではない、前の戀ひて死なましの説とは反對
に家ある妻女からの消息には、多少の厭味も云ふてあ
らう、(こちらで)美しひ人があれば余り御不自由もあるまじ、こを
たは一人さびしく御帰りの程を待ちこがれて(などと)、必ず
云ふてきたらう、此身人部王の説は即それに答へた説
である、家なる妹といふ詞の反面には外に女のあること
が充分に見えて居る、
此三津の濱に忘貝があるが吾は決して御身を忘
て居りはせぬ、茲に假の契りはあつても(も)家なる人を忘
れるやうな自分でないい、苟且にもそんなことを云て
くれな、御身にさうは思はれと吾は一筋物悲しくなつ
てまらめ、かういふ意味の説である、單に詞の
上で見ると實情の冷しひ感じもするが、其調子の
哀々たる、如何にも物悲しく思つて云ふた詞らしく

見える、今世人の自(ちなみに)得手勝手なことを(ちなみから)、
程よく妻女を欺き表面を繕ふものとは、殆と根
本を異にして居る、眞に本氣になつて密アろ

て、自かういふ意味の歌である、單に詞の上で見ると實情の冬しい感じもするが、其調子の哀々たる、如何にも物悲しく思つて云ふた詞らしく見える、今世人の自得手勝手なことをちながら、程よく妻女を欺き表面を繕ふものとは、殆と根本を異にして居る、眞に本氣になつて密アろ泣顔をして妻女の慰解を云いとかんとせる趣が能く一首の調子の上に顯はれて居る、意味は云ふに及ばぬが、調子の上に云ふが見える、決して心浮いて居る人の歌でない、萬葉集の歌の最も味はへき点である、此歌も別によい歌とは云つないが注意すへき價のある歌である、三津の濱なると云ひ又家なる妹と云ひ一首の中に同語二つある、調子に締りがない、外此句は仮名遣ひ併しながら眞情流露した歌には其所整はぬ所に味ふへきものなることを注意せねばならぬ、今の人は只々詞調の整はんことにのみ力を入れて此眞情の溢るる自然の發動を忘れたるかにして居る、俳人などには到底解せしむることの出來ぬことである、

草枕、客去君跡、知麻世浪、岸三埴布爾、仁寶播散麻思手、

草枕旅かく君と知らませは岸の埴生にはなさましを

第一句二句三句とも詞の解を要せぬ、「岸の埴生」とはスミノエ

には到底解せむるふとの出来ぬさとである、

草枕、客去君跡、知麻世婆、岸之埴布爾、仁

寶播散麻思乎、

草枕旅カく君と知らませは岸の埴生にには

はさましを

第一句二句三句とも詞の解を要せぬ、「岸の埴生」とは

歌の作者か住吉の人であるから即住吉の岸で、埴

は土黄にして細密なるをいふとある、染料にする土で

あらう、今日の世にも土にて物を染むるさとは聞く所

で、住吉の埴生とは当時名高き物らしい、埴の

下に生といつるは茅生蓬生菖生などと同種の用語

住吉能岸乃黄土粉二々寶比天由香名、馬之歩押止

駐余住吉之岸乃黄土爾保比而将去とある歌にて

住吉の黄土（とぶもの）を知る、「にほはさましを」は色をつけて

染めましものをである、今の詞は「にほふ」を香に云

ふが古は色に云ふたのである、勿論色にいふ「にほはす」は

今の染物とは少し違ふてほんのり艶のつく位をいふ

のであらう、歌全首の意は、今旅立し行く君と

知つたならは、住吉の名高き黄土に御衣をにほは

して差上げたかつたものを、何[illegible]別れて去

まうは何となく飽かぬ心地に残惜しいとの意である

、此歌長皇子か供奉の先で居た娘子の歌ゆへ

、皇子の方からは都に還るのである、然るに草

まうは何となく飽かぬ心地に残惜しいとの意である、此歌長皇子か供奉の先で居た娘子の歌ゆへ、皇子の方からは都に還るのである、然るに草枕旅ゆく君と歌つたは、詞藻の働き、人手程面白い詠振りである、もうお帰りにを吗をらばとの心を如斯綾なしてゐふたは手柄である、作詩家は此用意がなければならぬ、下の二句は黄土生にはは咲まーをとゐふて、何をにはは咲すとも誰のをにはは咲すとも云はず、云い足らぬようぢやが、さて一読すれはそ小は皇子の衣をにほはさんとの心が解る、頗る働いた詞の使方である、実際でなけれは詠めない歌で、女でなければは思ひつかぬ趣向である、併し此時代に、衣を黄土にはは咲すといふことと実際如何なることを せつもものにや、「にはは咲しかむ旅のあるし」とゐふ所を見ると衣全体を染めるのではなく袖や裾の一端を色に摺るにやとも思はれる、一般の風習かよくわからねは、ほんとうの趣味は解らぬ、

て差上げたかつたものを、何[illegible]別れて去

わが国の芸術、明治文学史
中巻口絵所収

併し此時代に、衣を黄土ににほはすといふことと、実際如何なることを せるものにや、「にほはしかむ旅の寝るし上」などと云ふ所を見ると衣全体を染めるのではなく袖や裾の一端を色に搭るにやとも思はれる。一般の風習であつたらしい、此娘子の歌なども其時の風習かよくわからねは、ほんとうの趣味は解らぬ、

わがぶ芳縁、明治文学史

中巻口絵所収